

Title	＜翻訳＞ ベトナム短編小説試訳(1) : ヴァン・レー 著『再会』
Author(s)	Lê, Văn; 富田, 健次
Citation	大阪外国語大学学報. 63 p.31-p.43
Issue Date	1983-03-22
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80961">https://hdl.handle.net/11094/80961</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ベトナム短篇小説試訳（１）

ヴァン・レー著『再会』

富田健次

ベトナムは短篇小説の宝庫である。それらの中から興味深そうな作品を選んで、毎年１～２篇の割合で訳出・紹介してみたいと思う。第一回は、所謂「ベトナム戦争」で引き裂かれた夫婦の愛と苦悩を、主として妻の方のそれに焦点を当てて書かれた、ヴァン・レー著『再会』を選んだ。戦争の裏舞台で運命に弄ばれる兵士の家族達の苦悩が生々と描き出された作品であると思う。主義、主張に拘らず、戦争は凡て悪であるということを、言わば、後方から告発した、反戦の叫びとも読める。原本は婦人出版社（Nhà xuất bản Phụ nữ）編集・刊行の短篇集『再会』（Gặp Lại）に収められている同名の作品（この作品の題を取って、単行本の題としている）を用いた。この短篇集には、合計７篇の短篇が収められ、凡て、「ベトナム戦争」前後の南部ベトナムを舞台とし、主として女性・夫人達の苦悩を題材としている。ここに名を連らねている著者達は、ほとんど無名の作家達であると思われるが、その素人っぽい表現が、却って、リアリティを高め、現実肉迫し得ているように私には思われる。「ベトナム戦」後を今尚重く引きずっているベトナムの、就中、南部ベトナムの人々のことを思うと胸が痛むが、これを小説の題材として正面から扱った作品はまだ少いだけに、今後、こうした題材を扱った作品群が多く出現することが予測されるし、また、期待される。これ迄は、抗仏・抗米・救国そして国土の解放を訴えるリアリズム小説が多かっただけに、新たなテーマを持った新しいジャンルの小説として注目される。

急に決まった1982年9月初旬から約半年間のベトナム訪問を目前にした時期での翻訳作業で、十分な推敲が出来ないまま原稿を手渡さなければならない羽目になったことが唯一、心残りである。不適切な訳、誤訳も多々あるかと思う。読者賢者の御叱正を賜れば幸甚である。

(1982・8・30)

## 再 会

ヴァン・レー：著 富田健次：訳

「郷里へ帰ってから、ずっと、捜していたんだが、全く埒があかず、新聞やテレビやラジオでも

消息を尋ねてみたりしたんだよ。あちこちの分隊の仲間達にも頼んで捜してもらったし、君を捜すのに年休もほとんど使ってしまった。そりゃあ、行く先々で聞いてまわったもんだよ。だのに、君が僕の分隊のすぐ側にいたなんて、……。」

男は女をジッと見つめた。男の両の目は、うっすらと赤味がさし、大きく見開かれたまま瞬きひとつしなかった。女の方は俯いたまま、臉を固く閉じていた。その臉から、白く濁った涙がひと滴、零れ落ちた。女は嗚咽を堪えながら口を開いた。

「分かっていたわ。生きていれば、屹度、あなたは私を捜しにこのキエン・トゥオンへ来るだろうってことは。でも、戦争だったんだわ。何もかも、うまく行くなんてことあり得ないのよ」

「うん、分かってる。戦争だったんだ。うまく行く訳ないよね。でも、僕が言いたいのは、君が僕のすぐ側にいながら、どうして、僕のことを捜そうとしなかったかってことだ。ねえ、どうして黙っているんだい。君は僕に一年以上も時間を無駄にさせて、……」

それから、男は急に語調を落として言った。

「もう望みを失いかけていたんだが、君を何とかして捜し出すんだと、ずっと、自分の心に言い聞かせて来たんだよ。もし君自身に会えなくても、少くとも君の消息だけでも何か掴めたらとね。そんな微かな望みを持って君をずっと捜していたんだよ。でも、まさかこんな所で君に会えるなんて。何て言ったらいいんだい。今までの苦労は、君を見つけ出した今となったら、もう何の意味もないと言うことかい。でも、来てくれるのだろう。君とあの子は僕の分隊に来てくれるんだろう。僕と一緒に暮らしてくれるのだろう。ねえ、すぐに来てくれるのだろう」

男は一本気な人間だった。男は女を信じて疑うことを知らなかった。女は男を振り仰いだ。その顔には当惑の表情がありありと浮かんでいた。しかし、すぐに女は気を取り直した。この人は、これまでの自分の生活について何ひとつ知っちゃいないのだ。長い間の激動と苦労が彼女の身をすっかり深みへ沈め込んでしまったなどということなど。遠い所にいたこの人には、何ひとつ分かる筈はない。言うべきか、言わないでおうか。この思いが、昼となく夜となく彼女の心を苛んでいたのだった。体はだんだん痩せ細り、目もすっかり落ち窪んでしまっていた。顔にはありありと疲れの色があった。性格さえもすっかり変わってしまったようだった。娘のニューにまで、「お母さん、何か悲しいことでもあるの」と言われる始末だった。

彼女は本当に悲しかった。戦争が終わって平和が戻って来てから一年余り、彼女には、心の休まる日は一日としてなかった。彼女はいつも男のことを思っていた。男がラジオで自分のことを捜していることも知っていたし、新聞でも読んでいた。でも、彼女は男を捜しなくなかった。男に会いたくなかった。自分のことなんか忘れてしまって欲しかった。会えば、彼女は、屹度、男を苦しめるに違いなかったからだ。彼女は、もう男には会うまいと心に固く言い聞かせていたのだった。

ところが、全く偶然にも、男が市場へやって来たのだった。彼女はそこで野菜を売っていた。男は呆然とその場に立ち尽くした。二人の両の目は、放心したように、不安気に互いを見つめ合った。それから、男が彼女の方へゆっくりと歩み寄って来た。

「君なんだね」

彼女は、そのまま、瞬きひとつしないで男を見つめていた。彼女の目は何かに取り憑かれてでもいるかの様に大きく見開かれていた。彼女は黙って立ったまま、口をきこうとしなかった。身動きひとつせずその場に立ち尽くしていた。男が近づこうとすればするほど、彼女の目は一層、大きく見開かれた。そして、ブルッと身震るいすると、突然、その場に崩折れてしまった。男が急いで助け起こした。

二人は長椅子に腰を下ろしていた。隣には男が坐っているのだった。彼女は何度も、男に嘘を言ってしまうかと思ってみた。だが、言いかけては心がキリキリと痛むのを覚えるのだった。諦めよう。もう全部、彼に話そう。自分に起こったことを残らず話そう。自分が考えていたことを洗い浚い話してしまおう。何も隠すことはないのだ。残らず、……。

「あなたには分かりっこないわ。あなたが私の所を出て行って13年。その間に、本当にどんなことが私に起こったのか、あなたには分かる訳はないわね。あなたは今すぐ一緒に住めと言うけど、私がどうしても嫌だって言ったら、……」

彼女の言葉は、さっき以上に男を仰天させた。男は彼女の夫なのである。その夫が言うことを、妻の彼女が聞き入れてくれない筈はない。だが、今、確かに彼女は自分の言葉を拒んでいるのである。

「君のこと、知らなけりゃならんことなんて、もう何もないよ」

「つまり、あなたは私のことを良く思い過ぎているってことだわ。あなたが私の所にいない間、私が別の男の人と一緒にになったなんて、あなたには思いもよらないことでしょう。それに、その人、あなたの敵だった人なのよ」

彼女の言葉に男は気を失いそうになった。彼女の生活がそんなに大変だったのだろうか。彼女に会えたのだから、これからの生活はずっと楽になるとばかり思っていた。彼女は自分の所へ戻って来てくれるだろうし、もし、まだ仕事がないのなら、自分が何か見つけてやろう。子供はグエン・ヴァン・チョイ小学校へ入れて勉強させてやろう。自分は軍の仕事が続け、時間がある時には、夕方など、彼女と子供をどこかへ遊びに連れて行ってやろう。それなのに、彼女と会って、事がこんなにもややこしいことになろうとは。男は呆然として彼女を見つめるばかりで口もきけなかった。彼女もそれからただ泣くばかりであった。声を殺して嗚咽を繰り返していた。今、自分が言ったことが彼を苦しめているのだ。でも、自分は本当のことを言ったに過ぎない。自分の考えに忠実に行動した筈なのだ。

娘のニューの姿が門の外に見えた。彼女は素早く涙を拭った。子供に、自分が悲しんでいる姿を見せたくなかった。彼女はそっと男に言った。

「あの子だわ」

男は外を見やった。自分の娘が学校から帰って来たのだった。愛苦しい顔立ちをしている。目と長い首は母親譲りだ。高い鼻と口許は自分に似ている。男は駆け出して娘を抱き締めたい衝動に駆

られた。瞬時の心の葛藤の後、男は坐り直して、子供が自分のことが分かるかどうか見てみることにした。ニューは、家に駆け込んで、歓声を上げると、そのまま母親の懷に飛び込んだ。それから、おずおずと男の方へ顔を向け、紅葉のような手の指の隙間から男の方を盗み見た。男は娘に微笑みかけた。妻は、優しく髪を撫でながら娘に尋ねた。

「ねえ、誰だか分かる」

娘は小さく笑って言った。

「兵隊のおじちゃん」

妻は男の方に目をやり、引きつったような笑いを顔に浮かべながら更に尋ねた。

「本当に、誰だか分からないの」

娘はかぶりを振った。

「お前のお父さんだよ。お前のフエンお父さんだよ。お父さんがお前を捜しに来て下さったんだよ」

男は両手を差し伸べて子供を招いた。声が少し上ずっているようだった。

「おいで、こっちへ。ニュー。こっちへ……。お父さんだよ」

娘はそれでも、男を見ながらぐずぐずしていた。

「さあ、お父さんの所へ行ってお上げ」妻が促した。

娘は母親の顔を探るような目を見た。母親は顎を少し突き出して、『お行き』とばかり合図をした。娘は男の方へ歩み寄って、男の胸に顔を埋め、小声で叫んだ。

「お父さん」

男は何があっても泣いてはならないと心に誓っていた。男は何事にも驚かない強靱な意志の持ち主だった。しかし、自分の子供を前にしては、とうとう、涙をこらえることができなかった。男には、妻のように醒めた気持ちにはとてもなれそうもなかった。

☆ ☆ ☆

妻は小舟を操って夫を送って行くところだった。ドン・タップ・ムオイの村は、夕方になると、人氣がなく、寂しかった。舟は、水田の果てしない拡がりの中を彷徨い、益々、見知らぬ所へ迷い込んで行きそうであった。風が起こり、波が舟縁を叩いた。舟は上下しながら波の小さな塊りにぶつかっては、ズイと押し流された。西の方では、太陽が、白い雲の中に少しずつ姿を消そうとしていた。風は先程より少し穏やかになったようだった。二人は黙りこくっていた。話すべきことは、もう二人ともすっかり話してしまっていた。いよいよ目的地へ近付くと、妻は釈迦頭樹の茂みの側に舟を止めた。彼女は髪を下ろして後で束ねた。それから、夫の坐っている舳先の方へ蹣り寄った。彼女はそっと夫を片側へ押し遣ると、彼と並んで腰を下ろした。夫は手を伸ばして、優しく妻の頭を自分の肩へもたせかけた。そして、彼女の手を握った。二人はそのままじっと坐っていた。夫はとりとめもない話をしていた。同じことを何度も何度も繰り返しているようだった。妻は坐ったまま耳を傾け、時々、「ええ」と相槌を打った。彼女の方もあれこれ話をした筈であった。しかし、

まだ、ひとつだけ、喉まで出掛っているのに言い出せないでいることがあった。彼女は唇をギュッと噛み合わせて、気を抑えた。少し経ってから、彼女はやっと口を開いた。

「ねえ、あなた。私、……」

「どうしたんだい」夫が尋ねた。

彼女は感情を抑え切れなくなった。黒く輝いている両目から、キラッと涙が溢れ出た。彼女は涙の向こうで、少しはにかみながら、

「あの、私ね、……。私、赤ちゃんができたの」

夫の顔が一瞬パッと明かるくなり、声が震えた。

「本当なのか。お前、まさか、かついでいるんじゃないだろうね」

「本当なのよ。嘘なんかじゃない」そう言いながら彼女は夫の肩にそっと唇を立てた。夫は体に何か熱いものが走るのを覚えた。それから、責めるような口調で言った。

「どうして、もっと早く僕に言ってくれなかったんだ。よりによって、こんな時に言わなかったって、……」

「私だって、ずっと、あなたに言いたい言いたいと思っていたわ。でも、はっきりさせてからじゃなきゃ、とても言い出せないじゃないの」

夫は妻の頭を優しく叩いた。彼女はその手にいやいやするかのように、夫の胸に頬を押しつけた。夫は彼女の髪を撫でながら、そっと囁いた。

「嬉しいよ。言ってくれて。これが分かるかい」

「ええ、聞こえるわ。胸がドキドキしてる。あなた、何だか落ち着きがなくなったみたいよ」

「うん。どうも落ち着かない。こんな急な嬉しいニュースにはドギマギしてしまう」少し口籠った後、彼は言葉を継いだ。「ねえ、今年は1964年だろ。4、5年したら帰れると思うよ。君もしっかり子供を育ててくれよね。どんなことがあっても、僕に代わって、この子を守ってくれよね。きっと帰って来るから。ねえ、出来るだろ」

彼女はフッと考え込むような仕草をした。彼がすぐに尋ねた。

「信じられないのかい」

「そんなことないけど、何て答えたらいいのか、返事に困るわ。約束した以上は恥ずかしいことできないし。でも、この私が生きている限りは、立派な大人に育て上げて見せるわ。あなたのことも話して聞かせるわ。大きくなっても、あなたの顔は分からないわね。でも、お父さんの優しさだけは分かる筈よ」

「うん、有難う」

「よしてよ。そんなこと奥さんの勤めだわ」彼女はそう言いなが棹にツイと手を伸ばして立ち上がった。

「ねえ、あなた。後で、あなたが岸に上がったなら、私、屹度、堪え切れずに泣き出すと思うけど、許してね。屹度、泣くわ。私、こんな時、自分を抑えることなんて、とても出来そうもないの」

彼は頷いた。彼女は棹を突いて舟を進めた。

☆ ☆ ☆

招撫機関の役人の中に、彼女の夫はどうも地方の参謀局作戦室の幹部らしいと訴え出る者があった。ある日の昼下がり、彼女が子供に水浴びをさせていると、地区の警察官が何人か、突然家に押し入って来た。彼らは何も言わず、彼女を拘束した。別の数人の警官が慌しく家宅搜索を始めた。一時間余りにして、彼らは帰って行った。帰る時も彼らは一言も言わなかった。彼女とても聞いてみる気もなかった。こんな家宅搜索にはもう慣れっこだったのだ。その日以来、彼女はどこへ出掛けても呼び止められて、訊問された。彼らは彼女を執拗につけまわした。監視し、つけねらっている目に、彼女は、絶えず自分の足許が掬い取られそうな感覚があった。彼女はいつも激しい不安と喝望感の中で暮らし続けていたのだった。彼女はとうとう、家を出ることにした。サイゴンへ行って親戚の叔母の家で暮らすことにした。そして、ある土建屋の親方の家でセメント捏ねの仕事をさせてもらうことにした。新しい土地で暮らすのに必要な偽りの書類を手に入れるのに、彼女は十万五千ピアストルもの大金を払わなければならなかった。子供には、もしも誰かがお父さんのことを尋ねたら、お父さんはもう死んでしまってこの世にいないと答えるよう、よく言い聞かせた。嘘を言い続けて暮らすことにした。このように、ひっそりと静かな子育てをしながら夫を待つことにしたのだった。孤独だった。口も余りきかなかった。何事にも慎重だった。そして、出来るだけしとやかに振る舞うようにした。昼間は仕事に出て、夜は子供の待つ家に帰った。そして子供にいろいろな話をして聞かせた。街へ遊びに行くことはなかった。ひたすら家にとじ込もっていた。こうしていれば身を守ることができると思ったからだった。

ところが、彼女のこの考えは間違っていた。このようなひっそりとした生活は逆に人の注意を惹いてしまったのだった。人は好奇の目で彼女の生活を眺めるようになった。彼女の優しさを好ましく思うものさえ出て来た。そのうち、周りの誰彼となく彼女の家へやって来てはお節介を始めるのだった。その中に、ある私立病院の看護士をしているキェットと言う一人の青年がいた。三十を少し過ぎたばかりであったが、職業柄、実に折目正しく、思慮深く、何事にも慎重であった。家族は中部に住んでいるということであった。辛い境遇の故に彼は家族を残してサイゴンへ出て暮らしているのだと言う。青年は彼女の生活に同情を寄せていた。そのうち、彼女を心底から愛し始めるようになった。彼女が拒めば拒むほど、彼は愛を募らせて行った。彼はあれこれ彼女の世話を焼き続けた。彼女は激しく胸が痛んだ。自分の家を訪ねて帰る度毎に、彼の顔は悲しみに曇った。失意の人の煩悶が彼の表情にはありありと現われていた。彼女とて、誠意を尽くして彼に言い続けていた。自分はまだ二度と結婚するつもりはないし、夫が死んだ今となっては、自分には子供を育て上げる義務が残されているのだと。そして、もっと固い拒絶の意を示すために、彼女は極力、彼と会うのを避けようとした。しかし、彼女が避けようとすればするほど、彼はますます近付いて来るのだった。そして、執拗にその原因をつきとめようとするのだった。彼にはもう自分の目的しか眼中にないようだった。彼の誠実さ、意志の固さに、彼女は益々胸を痛め、手を焼くばかりであった。彼女

は、もう何と言ったら良いのか分からなくなってしまった。

ある日、彼女が市場で仕事をしていると、ある人が彼女を捜しに来て、すぐ帰るようにと言った。彼女は、一体何事が起こったのだろうと不安でたまらなかった。彼女は息壇切って家へ帰った。帰ってみると、娘のニューが高熱に苦しんでいるではないか。彼女は慌てて医者のところへ連れて行った。医者は小児麻痺だと診断した。そして、子供を救うには、数十万ピアストルのお金がかかるという。そんな大金、どこで捜したら良いと言うのだろう。彼女は自分の無力さに涙が溢れた。知らせを聞いて、キェット青年が駆けつけた。彼は、自分にこの子を直させてくれと頼んだ。しかし、彼女は、そんなことをしたら、自分の人生が全く変わってしまうようなことになるのではないかと恐れた。彼女は悩み、迷った。そんな彼女の考えを見透かしたかのように、キェット青年が更に言った。

「僕は、娘さんを直して上げたいだけです。直ったからと言って貴女に結婚を迫ろうなんて気持ちには毛頭ありません。医事に携わる者としての良心が、人の弱みにつけ込んで自分を利するようなことをすることを許す訳がありません。もし貴女が今、私に直させてくれなかったら、あの子は死んでしまうか、一生障害者になってしまうでしょう。そうしたら、貴女はなくなられた御主人達に何と言って申し開きをするのですか。貴女に娘さんを託されたのでしょうか」

キェット青年の言葉を聞いて、彼女は彼の良心を信じることにした。青年は自分に会って、何度心の内を打ち開けたか知れない。しかし、彼は決して粗暴な振る舞いはしなかったし、人を利用するようなことも決してなかった。常に折目正しい青年だった。彼女は彼に娘を託すことにした。そして、三ヶ月足らずで、娘はどうか治った。やっとヨロヨロと何歩か歩けるようになった。その日、青年は彼女を呼んだ。わが子を前にして、彼女は胸が張り裂けんばかりに感動した。彼女はキェット青年に心から感謝し、涙を流した。青年は、本当ならば、彼女の娘の危険な病気を直して、大いに喜ばなければならない筈であったが、少しも嬉しくなかった。悲しいだけであった。彼女を愛することができないのが、唯々、悲しかった。そんな気持ちが彼女にも痛いほど伝わった。しかし、彼女にはどうしたら良いのか分からなかった。青年は何度も何度も繰り返した。永遠に貴女だけを愛し続けるのだと。弱気、同情、恩義、そして衝動などいろいろな念に、遂に負けて、彼女は青年と夫婦の契りを結ぶ約束をしてしまった。

その夜、彼女は後悔の念に駆られて涙を流した。次の日は仕事を休んだ。その次の日も、次の日も仕事に出ようとはしなかった。夫のことを考えると涙がこみ上げ、そして自分を責め苛むのだった。キェット青年との婚礼の日迄、まる1週間、彼女は泣き通した。

☆ ☆ ☆

夫はその翌日、妻の家で彼女と会った。妻は狭い鉄製のベッドの端に腰を降ろした。夫は、彼女の傍の小さな椅子に坐った。その日は、彼女は市場を休み、家に居てくれたのだった。彼女は、夫の留守の間に自分に起こったいろいろな事を夫に話して聞かせるために、その日の午前中を費そうと思っていた。そこに坐っている妻は、少し体も小さくなり、目は暗く、鋭くなっていた。彼女は



うつむいて話をしながらも、しきりに涙を拭った。彼女が話せば話すほど、夫は彼女がいじらしくてたまらなくなるのだった。確かに、彼女には落ち度もあったかも知れない。しかし、彼女の置かれた環境の中で、一体、外にどうすることができたであろうか。それだけに夫は辛かった。あの時、戦争に勝つ機会はいくらでもあったのに、まだまだ力が足りなかったことが、今になって悔やまれた。卯申の年（訳者注：1968年。この年の旧正月に始まった南ベトナム民族解放戦線による、有名な『テト攻勢』のことを指す。この都市攻勢は、結果的には失敗に終わったが、インドシナ解放戦争に一大転機を与えたものと、高い評価を受けている）、味方の軍にもう少し力があつたら、どんなに多くの家族を崩壊から救うことができたか知れない。何百万もの人達を、敵の血塗られた手から守ることができたかも知れない。そして、人々の生活も、もっと、ずっと楽なものになっていたであろう。いや、やめよう。もう済んでしまったことなのだ。我々に残されているのは、すべての人がこれから向かおうとしている未来だけなのだ。

「キェットさんと一緒になった時」彼女は続けた。「私は自分の人生を犠牲にしなければならなかったの。子供を育てることしかなかったのよ。子供を立派な大人にするためだけだったのよ。私は、もう本当の自分は死んでしまったんだと自分に言い聞かせたわ。もう子供しか残ってなかった。一緒になってからも、キェットさんはとても優しくかったし、よく面倒を見て下さったわ。子供のことも、とっても心配して下さったわ。でも、いつか、ニューにこんなことを聞いてみたことがあったわ。

『キェットお父さんはどうだい』

『キェットお父さん、私に、いろんなものくれるわ。私が何か欲しいって言ったら何でもくれる』

『でも、どうしてお前はお父さんに甘えないんだい』

『だって、キェットお父さん、何だかよそよそしいんだよ』

あの子のこんな言葉が、随分、私を苦しめたわ。そんな時、益々、あなたへの思いが募ったわ。私、何とかしてあなたのことを忘れて、ニューの母親として、キェットさんの奥さんとしての本分を果たそうとしたわ。三ヶ月、彼と暮らしたあと、彼、兵隊に取られたの。家は広がったんだけど、私には合わなかったし、それに、どうしてもあそこの兵隊さん達から離れたかったの。彼らの側にいれば、益々、あなたへの罪が募るような気がしたの。その後、彼は前線へ送られて、結局、死んじゃったわ」

彼女はうつむいたまま、涙を拭った。夫もうつむいたまま、溜息をついた。彼女の口調は益々沈んで行くようだった。

「結局、私、軍人家族宿舎を捨てて、元の所へ戻ったの。私達のために、私達が住むように建ててくれた家には住みたくなかったの。子沢山の、ある女の人に譲って上げたわ。そして、私の貯金を確かめて、この小さな家を建てたの。狭いわね。でも、私の家なのよ」

夫は頷いたが何も言わなかった。彼は、何か言わなければならないのだろうかと思分迷った。し

かし、もし何か言ったとしても、結局、自分の気持ちを表現し尽くすことができそうもないのだった。それに、彼女の悲しみを癒してやることなどできそうもなかった。彼の心は乱れた。焦った。

「彼の遺族恩給も給料も全部一まとめにして、私、中部の彼の家族に送ったわ。私にはもういないものなの。私、一度でも他人に頼らなければならなかったのが今でも心苦しくて。私、もう誰かに頼って生きるなんてまっぴら。ましてや、死んだ人のお金を当てにして生きるなんて嫌だわ。私はまだ働けるし、私の稼ぎで子供を養うことぐらい出来るわ」

この時になって、夫は彼女のことが愈々よく分かったような気がした。厳しい生活が、彼女の考え方も感情もすっかり変えてしまったようであった。彼女の口から吐き出される言葉は、最早、自分の妻の言葉ではなく、全く別人のものであるようにさえ思えた。ゆったりした物腰で、彼は立ち上がると、手を彼女の肩に置き、沈んだ調子で言った。

「もういいんだよ。よく分かったよ。それ以上言えば、胸が痛むだけだ。たとえ、あれが過ちだったとしても、君のせいではない」少し口籠った後、再び続けた。「僕達、傷ついたのなら、お互いにその傷口を塞がなければならない。ねえ、今もねえ、……」彼は哀願するような口調になって、「僕の部隊の連中は皆、僕達と一緒に住んでももらいたいと思っているんだ。僕は君のことを悪くなんて思ってやしない。君の話を聞いて、僕は益々君のことが好きでたまらなくなってきたぐらいさ。僕は君のような女房を持って、とても嬉しい。どんなことがあっても、君は僕の所へ帰らなければならないんだよ。僕達、もう何年も遠く離ればなれになっていたんじゃないか」

彼女は何も言わず、咽び泣くだけであった。肩は小刻みに震えていた。夫の優しい思い遣りに激しく胸が締めつけられた。もしも夫がこのような優しい言葉を掛けてくれなかったら、どんなにか良かったであろう。もしも夫が、自分のことを構わないで放っておいてくれたならば、どれほどか気が安らいでいたであろう。夫の高潔過ぎる心が彼女を途方に暮れさせるのであった。

「ねえ、お願いだ。答えてくれ。どうして、泣いてばかりいるんだ」

彼女は相変わらず、しゃくり上げながら、

「私のような者をいつまでも愛していてくれて有難う。私だって、そんな傲慢な女じゃない。でも、もう、あなたの妻としてはふさわしくないのよ。私、あなたと一緒にいれば益々、胸が苦しくなるでしょうし、自分のことが情無くなると思うの。私、そんな中で暮らすのはいやだわ。私、一人でいたいよ」

「いや、そんなこと言わないでくれ」

彼女は、恰も、強固な決意をすべてそこへ注ぎ込むが如く、きっぱりと言った。

「いいえ、私はこのままでいたいわ。このまま一人でいたい」

「可笑しいな。もしかしたら、もう僕に愛情がなくなったんじゃないのかい」

「そんなことないわ。今だって愛してるわ。私がどんなにあなたを愛しているか分かって欲しいわ。何て言ったらあなたに分かってもらえるのかしら。私はあなたの妻としてふさわしくないのよ。」

私はふさわしくない、……」

彼女はまたも泣き始めた。堪え切れずに大声で泣いた。夫も目に涙が滲んで来るのが分かった。

その時、門の外で、娘のニューの声がした。彼女は慌てて涙を拭った。夫も拭った。彼女は子供の前では、努めて平静に振る舞おうとしていた。しかし、彼女のぎこちない態度は、却って、娘に疑問を抱かせるのだった。

「お母さん、泣いてるの。お父さん」

彼は子供の頭を撫でながら、妻の方を見て、

「お母さんに聞いてごらん」

「ねえ、そう、お母さん」

彼女は笑った。しかし、笑い顔がどこか引きつっていた。

「お前はまだそんなこと気にしなくても良いのよ」そう言うと、彼女は夫の方を振り向いて、

「今日は、あなたもここへ残って、私達と一緒に御飯を食べて行くわね。昨日は、私、引き止めなかったわ。でも今日は、ここにいてね」

彼は頷いた。夫が子供を抱いて、いろいろなことを聞いている間、妻は台所を忙しく走りまわっていた。彼女は夫に本物の田舎料理を食べてもらいたかったのだ。彼女がバタバタと忙しそうにしているのを見て、夫は子供に台所へ降りてお母さんの手伝いをするように言った。しかし妻はこれを押し留めてこう言うのだった。

「いいえ、私にやらせて。私のこの手であなたに食べてもらおう御飯を作りたいの。10年以上も経ってやっと、私、あなたのために御飯が作れるのよ」

夫は妻の言う通りにさせた。そして自分は、上って食器の用意をした。ふと、妻が子供に尋ねた。

「お前、フエンお父さん、キェットお父と比べてどうだい」

「フエンお父さんもお土産買ってくれたし、キェットお父さんも買ってくれたわ。でも、キェットお父さんは勉強のことなんか絶対聞いたことなかったわ。フエンお父さんは何度も聞いてくれるし、…。立派な人になるために、一所懸命勉強しろって言ってくれるわ。フエンお父さんはお母さんと一諸で、私が立派な大人になることばかり考えてくれているんだわ」

彼女は娘がいじらしくてたまらなかった。

妻の作った御飯は本当にうまかった。しかしとてもつましいものであった。雷魚の身を煮た酸味スープ、豚肉の甘辛中華煮それに生のもやしと清物を少々という献立であった。これは、彼を送り出したあの日の献立とそっくり同じものであった。妻が意識的にそうしたのかどうか、夫には分らなかった。

☆ ☆ ☆

夫と会ったその日から、彼女は悶々として幾晩も眠れない日が続いた。夫への愛が彼女の胸を狂

おしく駆けめぐった。彼女は、夫と共に暮らした日々を憶い浮かべた。昔のことをあれこれ憶い出す度に、涙がグッとこみ上げて来るのだった。夫と永遠に離ればなれにならなければならないとしたら、どんなに辛く悲しいことであろう。いや、夫だって同じであろう。彼女は、自分には彼のところへ帰る資格がないのだときっぱり言った時の、あの夫の目を憶い出していた。ああ、あの時の夫の目は激しい動揺と苦痛で赤く濁っていたではないか。ふと、夫のところへ戻るべきかも知れないと思わないこともなかった。「戻る」という二字の意味は易しいが、それを実際の行動に移すことは測り知れないほど困難であった。後になって、仲違いでもした時、夫が古い話を憶い出さないという保障はない。そう考えると彼女は一層身悶えして苦しんだ。その度に彼女は、頭を振って決意を新たにするのだった。自分は夫のところへは二度と再び戻ることはできないのだと。

子供を参謀機関にいる夫のところへ帰らせている時など、彼女は心底、切なく、寂しかった。彼女はもう市場へ出る気力もなかった。戸を閉めて一人、家に閉じ込もっていた。御飯を炊く気さえしなかった。彼女は自分のこれ迄やって来た仕事を振り返り、自分の運命を歩んだ。百姓の後はセメント捏ねの仕事をし、市場の物売りになって、…。市場の物売りなど、誰が職業と呼んでくれよう。こんな仕事は、彼女のように貧乏窮まった者にのみとおかれる仕事ではないのか。

時には、田舎へ帰って暮らしてみようかと思うこともあった。しかし、彼女にはできなかった。帰っても近所近隣の人達の顔に泥を塗るだけだった。もう一度人生をやり直してみようか、初めから。この思いが、彼女の胸の中でフッと赤く輝いた。

父親の所へ行行って帰って来る度に、娘のニューは、誇らし気に彼についてあれこれ話をするのだった。そして、お母さんもお父さんの所へ帰るべきだと繰り返すのだった。そんな物言いの中には、明らかに、彼や彼の同僚のそれだと分かる言葉があった。そんな時、彼女はただ黙って微笑むだけで、それはいつの間にかほろ苦い涙に変わるのだった。

☆ ☆ ☆

来週、『新経済区』へ入植することにしたことを彼女は夫に通知した。知らせを受け取った夫は仰天した。彼女は何時だって、出し抜けるにこのような大きなことを決めてしまうのだった。彼女を説得して引き止める望みはもうほとんどなさそうだった。彼女を自分の所へ引き止めることができないでいるうちに、また彼女がこんな決心をしてしまっって、彼は悲しかった。彼は参謀機関から自転車を走らせて、彼女に会いにやって来た。彼女は家にはいなかった。彼女は婦人執行委員会のメンバーだったため、区の集会に出かけていたのだった。小一時間ほど待って、彼女はやっと戻って来た。娘のニューも学校へ行行っていて家にいなかったの、彼はゴロリと横になって、ただひたすら彼女のことについて思い巡らせていた。

彼女が帰って来たのを見て、彼は立ち上がり、米袋を受け取ってやりながら言った。

「君は何時だって急な決心をして、僕には何にも考えさせてくれないんだから」

彼女は苦笑いをしながら、

「私、このまま市場の仕事じゃ生きて行けそうもないの。私、もうずっとこのことを考えていたのよ。でも、もうよしにしたの」

「君は僕のところへ帰って来てくれずに、僕を随分苦しめているじゃないか。そのことが分からないのかい」

彼女は夫の質問には答えようとはしなかった。

「毎晩のように、私ね、ニューにあなたの所へ行行って、あなたと暮らすように言ったわ。あなたが機関へ連れて帰ってくれた日なんか、あの子大変だね。あの子はあなたのことが大好きなのよ。あなたも、手許にあの子が必要な筈よ。子供が出来てからというもの、ずっと、お父さんと子供が離ればなれになっていたんですもの。あなたは、あの子を側に置いておけば少しは悲しみが癒せるでしょう」

彼はどうしたらよいかわからなかった。彼は妻の目をまっすぐ覗き込んだ。彼女の両目は深く悲しみに沈んでいた。涙が今にも溢れ出そうだった。

「恐らく君は、僕にニューがどれほど必要かわ分かってきているんだろう。しかし、ニューは君が連れて行くんだ。君だってあの子が必要じゃないか。あの子がいれば、君も僕以上に寂しさが紛れるだろう。あっちへ行行って、あの子は勉強を続け、君がしつけをするんだ。なあに、時には、僕が君とニューに会いに行くさ」

彼女は頭を下げながら言った。

「有難う、あなた」少し間を置いてから、「どんなに苦労してでも、私、あの子を幸せにしてやらなければならないわ。私、あの子にこんな暮しをさせるのもう耐えられないの。私、あの子のために家も建ててやりたい。こんな狭い家じゃなくてね。一寸した庭と小さな畑付きが良いわ。あの子が住んでいた家は、母親が自分の手で建ててくれた家だという思い出を残してやりたいの。あの子、屹度、自分の家と土地に愛着を持つてくれると思うわ」

彼は、妻への愛情が胸に果てしもなく拡がって来るのを覚えた。愛情と尊敬の念が入り混っていた。彼は更に一層、妻のことが理解できたように感じた。彼女には、多くの女性達の持つ好ましい徳性ととも言うべきものが満ち溢れているように思った。

彼女は、夫が、自分の決心に戸惑っているのではないかと思った。夫にこんな深刻に黙りこくられたらたまらない気がした。彼女は出来るだけ明るく振る舞おうと、努めて笑顔を作った。

「私、もうそう決めちゃったの。あなた、どう思う」

少ししてから、彼がやっと口を開いた。

「君は立派な女だ。君の中には二人の人間が住んでいるんだ。猛烈に愛情深い君と、猛烈に厳格な君とき。君はとても立派だ。だけど頑固だよな」

彼女は笑った。

「それに、分らず屋、でしょ」

彼は、妻の言葉に深く頷いた。

「分からず屋だよ」

1977年3月 ホー・チ・ミン市

